

どんな時でも一人ではないことを忘れません

山形県新庄市立萩野学園

九年 正野 瑠 菜

夢は、なでしこジャパンのメンバーとしてワールドカップで世界一をとること、バロンドールをとること。小学生の時から東北トレセンのメンバーに選ばれたり、中学生になるとすぐに、U13、U14の日本選抜キャンプに参加したり、私は、その夢へ着実に、そして順調に向かっていたのです。五月の大会までは。

五月の東北大会をかけた、試合のシュートチャンス。私の右足に激痛が走り、シュートを打った瞬間、その痛みは全身をつき抜けたのです。自分から途中交代を申し出たのはこれが初めてのことでした。試合後すぐに病院へ行くと、その診断は、「離断性骨軟骨炎。」くるぶしの軟骨がすり減り、このままだと歩くことすらできなくなってしまうというのです。「治療は手術しかない、完治までは六カ月もかかる。」という医師からの宣告に私は耳を疑いました。これから、大事な試合があるのに。なんで、こんなことが震えました。このまま、サッカーができなくなってしまうのだろうか。日本代表は？ 私の夢は…、時間が経つにつれ、大きな不安が私に迫ってくるのでした。

六月七日の手術は、4時間もかかりました。包帯に巻かれ、動かないように固定された私の右足。絶望的な現実が目の前につきつけられ、胸が苦しくなりました。そんな時、病室でテレビをつけると、競泳女子日本代表の池江璃花子選手のニュースが流れていたのです。池江選手は、今年二月に白血病であることを公表し、現在も闘病生活を送っています。そのニュースは、一時退院し、家族と過ごした様子のブログでした。ブログの中の明るい笑顔。その笑顔から、病気を受け入れ、治すことに全てをかけているということが伝わってきました。輝かしい競技記録を残し、東京オリンピックでの活躍を期待され、海外合宿中に病魔に襲われたことは、どんなにショックで悔しかったことでしょう。池江選手は、自分が病に襲われたことで、同じ病に苦しむ人やけがに苦しむアスリートの気持ちを実感できたとも言っていました。そして、彼女のブログには、こんな言葉もありました。

「どんな時でも一人ではないことを忘れません。そして、忘れないでほしいです。一緒に頑張りましょう。」
 あんなに苦しい治療をしている池江選手からの「一緒に頑張りましょう」のメッセージ。私は、胸の奥が熱くなるのを感じました。世界中から寄せられる励ましの言葉を謙虚に受け入れ、「どんな時でも一人ではないことを忘れません」という、感謝を伝える言葉。世界のトップアスリートであることを決しておこらず、応援してくれる方の思いを大切にしている姿。その姿に、私は今まで周囲の思いを意識したことがあったらうかと恥ずかしくさえなりました。自分が今、日本代表のユニホームを着られるのは、私一人では、成し得なかったことなのに。

例えば、五歳からクラブチームに入り十年間、父が私の練習のために往復5時間の送迎を毎日してく

れていること、母の食事への気づかい、自主練につきも付き合ってくれた兄、試合には欠かさず応援に来てくれる祖父母。私は家族に背中を押されながら、日本代表のユニホームを着ることができたに違いありません。家族の支えは一番大きいけれど、練習で競い合う仲間が居てくれたこと。手術の時には、クラスメイト一人一人が「瑠菜負けるな、辛いと思うけどがんばれ」と寄せ書きをしてくれたこと。監督も、「あわてず治していこう」とメールをくれたこと。私は今までたくさんの人に支えられていたことに、心から、ありがたうと言わなければなりません。池江選手とのブログに出会い、私の夢のかたちが変わりました。自分と関わる全ての人の気持ちを謙虚に受け止め、感謝できる人になろう。世界中の人を、笑顔にできるサッカー選手になろう。世界中のトップ選手になる前に、人として認められる人でありたい。今はまだ、走ることも、ボールを蹴ることも、ベンチに入ることもできないけれど、あせらず治療に専念し、夢を必ず叶えると、自分と強く約束しました。

「どんな時でも一人ではないことを忘れません。」令和の新しい時代を、私も新しい自分になっていきたいと思えます。